

中国におけるピアノ教育の動向と改革の方向への検討 ——ピアノグレード試験の影響に着目して——

A Study of the Chinese Trends and Directions for Reform in Piano Education:
Focusing on the Impact of the Piano Grade Test

呉 曼 菱
WU Manling

キーワード：中国のピアノ教育，ピアノグレード試験，美育，雑誌『ピアノ芸術』（原語：『钢琴艺术』）

はじめに

1980年代末，中華人民共和国（以下，中国と略記）では，経済の急速な成長に伴ってピアノの学習ブームが起こった。それをきっかけに，中国音楽家協会は，英国王立音楽検定（ABRSM）¹を参考にして，1991年に独自のピアノグレード試験を展開した。中国において，芸術の検定試験は「社会芸術水平考級（The Measures for the Administration of the Band Tests of Social Art）」²と呼ばれ，本研究で取り上げるピアノグレード試験は，この「社会芸術水平考級」の「音楽」の項目に含まれるものである。

ピアノグレード試験が始まって以降の30年間に，合格者に与えられる「等級証書」が中国のピアノ教育のトピックになっていった。学習者と保護者のみならず，ピアノ教師も等級証書の取得に関心をもつようになった。そのため，ピアノ教育の目的は，等級証書の取得に偏っていった。

一方，ピアノグレード試験を批判する中国の音楽専門家も少なくない。例えば，上海音楽学院の教授である趙晓生は，「ピアノ教師と保護者たちはピアノグレード試験の等級を盲目的に追求してしまったため，結果的に子どもは科学的なピアノ教育を受けることができなくなった」（2009：31，筆者訳）と述べている。最近では，中国の指揮者である李心草（2020）が，ピアノグレード試験を見直す，もしくはこの試験制度をなくすという意見を中国の两会³で発表した。

中国のピアノ学習者や保護者，教師がピアノグレード試験に囚われている背景には，どのような要因があるのだろうか。また，ピアノグレード試験は，中国のピアノ教育にどのような影響を及ぼしてきたのだろうか。本稿では，中国における唯一のピアノ専門雑誌『钢琴艺术』（以下，『ピアノ芸術』と邦訳名で表記する）に掲載された記事を依りどころに，ピアノグレード試験の影響を明らかにした上で，中国のピアノ教育の動向と改革の方向性について検討する。

1. 中国のピアノグレード試験

1991年に中国音楽家協会が独自のピアノグレード試験を展開し始めたのを皮切りに，ピアノグレード試験の認定機構は増加していった。日本貿易振興機構（2012：2）によれば，中国の音楽グレード

試験の認定機構（ピアノグレード試験を含む）は合計48機構があり、年間の受験者数は100万人単位に及んでいる。本節では、ピアノグレード試験を実施している認定機構から代表的な機構を5つ⁴取り上げ、「社会芸術水平考級」の趣旨、その中のピアノグレード試験の内容及び評価の観点の側面から、中国のピアノグレード試験を概観する。

（1）「社会芸術水平考級」の趣旨

2004年7月1日、民間の芸術教育の健全な発展に向けて、中国の文化部は「社会芸術水平考級管理方法」を制定した。ここには、ピアノグレード試験を含む社会芸術水平考級の趣旨が「芸術教育の普及と国民教養の向上」にあると明確に示されている。「国民教養の向上」が趣旨に含まれている背景について、田奕（2000）は以下のように述べている。

中華人民共和国建国（1949年）の当時、……人口の分布が極端に不均衡のため、教育においての地域の格差問題も一層表面化した。……人口素質〔国民教養〕の向上は経済の発展を前提としているのである。逆に、経済の発展も人口素質の高度化にかかっている。それに、科学技術の進歩に従って、労働人口への量の要求が減っていく反面、質の要求がますます高まっていく。しかし、平均の低い人口素質が経済の改革と発展の要求になかなか即応できないのを意識した中央政府は、経済の改革が実施された直後、教育界に“全民族の教養〔国民教養〕を高めよう”と呼びかけ始めた。（田 2000：105）

※〔 〕内は筆者による補筆

田の主張を端的に言い表せば、経済の発展のために「国民教養の向上」が重視されているということになる。音楽教育と「国民教養の向上」にはどのような関係があるのか。梁娜（2013：119）によれば、中国において「音楽教育による国民教養の向上」という考えを始めて唱えたのは、孔子である。孔子は、「興於詩，立於禮，成於樂」⁵（『論語』泰伯編）と説いた。ここでの「樂」について、高婷（2001）は次のように説明する。

孔子は「音楽」と「楽しみ」という二つの意味合いにおいて「樂」を捉えていた。しかも孔子は、音楽としての「樂」であれ、楽しみとしての「樂」であれ、「樂」というものに人間のあるべき姿を示す方向性を与えていた。前述のように、孔子は「音楽」をもって教養の最高の段階としていたし、「楽しみ」をもって人間の理想的境地と見なしていたからである。このことは、孔子が「樂」というものを人間形成的意味合いにおいて極めて重視していたことを物語っている。（高 2001：46）

高（2001）の論考をそのまま受け入れれば、音楽教育を教養の手段とする考えは、中国の古代に遡ることができる。孔子の「音楽観」を「音楽」と「楽しみ」の2つの側面から捉えることを高（2001）は主張している。しかし、どのような音楽教育を通して孔子のいう二つの側面の「音楽観」を経験させるのか、この点については触れられていない。2つの側面をもち合わせたピアノグレード試験のあ

り方を議論していくことがより重要になるだろう。

(2) ピアノグレード試験の内容

各機構のピアノグレード試験の趣旨は同じであるが、試験内容や評価の観点は異なっている。表1は、代表的な認定機構5つの試験内容を筆者がまとめたものである。

表1：中国のピアノグレード試験の試験内容⁶

認定機構	ピアノ課題曲	ピアノ基礎練習	その他
中国音楽家協会 (1-10級)	①練習曲 1曲 ②バロックや古典派の作品 1曲 ③中国ピアノ楽曲や中国国外のピアノ楽曲 1曲	①音階 ②アルペジオ	(該当なし)
中央音楽学院 (1-9級)	①練習曲 1曲 ②ポリフォニーやソナタ 1曲 ③楽曲 1曲	①音階 ②アルペジオ	①楽典 ②視唱 ③聴音 ④音楽常識
中国音楽学院 (1-10級)	①練習曲 1曲 ②自由曲 2曲	①音階 ②アルペジオ	①楽典 ②視唱 ③聴音 ④音楽常識
上海音楽学院 (1-10級)	①練習曲 1曲 ②ポリフォニー 1曲 ③中国ピアノ楽曲や中国国外のピアノ楽曲 1曲	(該当なし)	(該当なし)
四川音楽学院 (1-10級)	①練習曲 1曲 ②ポリフォニー 1曲 ③中国ピアノ楽曲や中国国外のピアノ楽曲 1曲	(該当なし)	(該当なし)

認定機構ごとに課題曲が異なっており、バロック、古典派、ロマン派、近現代の名曲だけでなく、中国のピアノ作品も数多く含まれている。課題曲の選択肢からは、中国のピアノグレード試験において、自国のピアノ曲を含む様々な時代やジャンルの曲を理解する能力が重視されていることがうかがえる。

また、課題曲とは別に、ピアノの基礎練習も課されている。これには、音階、アルペジオなどが含まれている。その他に、楽典、視唱、聴音、音楽常識⁷の試験もあり、音楽に関する知識や「読む」「歌う」「聴く」などの「弾く」こと以外の音楽能力も問われている。ただし、表1から分かるように、すべての認定機構が楽典、視唱、聴音、音楽常識を課しているわけではない。中国音楽学院と中央音楽学院にはこれらの試験があるが、年齢、等級の制限がある。中国音楽学院では、7歳～25歳以外の年齢層と5級以下の受験生には、これらの試験を課していない。中央音楽学院では、3級以下の受験生にはこれを課していない。

受験生向けのレッスン内容は、ピアノグレード試験の内容によって決められることが多い。各機構の試験内容が異なる状況において、どのような内容を指導し、どのような能力を身に付けさせるべきかという戸惑いが生じている。このことについては、次節で詳しく検討する。

(3) 評価の観点

試験内容だけでなく、公開されている評価の観点にも違いが見られる（表2参照）。表2に示すように、等級に応じた評価の観点を示しているのは、中国音楽学院のみである。それ以外の機構は、読譜の正しさ、暗譜、演奏の流暢さ等の観点を示してはいるが、等級に応じた示し方はしていない。また、どの機構にも言えることだが、実際に試験官がどのような基準で成績を決定しているのかは明確に示されていない。

表2：中国のピアノグレード試験の評価の観点

認定機構	評価の観点
中国音楽家協会 (1-10級)	①暗譜 ②演奏の流暢さ
中央音楽学院 (1-9級)	①暗譜 ②読譜の正しさ
中国音楽学院 (1-10級)	1-4級：①読譜の正しさ ②演奏の流暢さ ③演奏技術 5-7級：①読譜の正しさ ②演奏の流暢さ ③演奏技術と音楽表現 8-10級：①演奏技術と音楽表現
上海音楽学院 (1-10級)	①暗譜 ②演奏技術
四川音楽学院 (1-10級)	①暗譜

2. ピアノグレード試験の影響

前節では、中国における現在のピアノグレード試験について趣旨、試験内容、評価の観点から概観した。本節では、中国のピアノ教育におけるピアノグレード試験の影響を明らかにする。本稿では『ピアノ芸術』に掲載された記事のうち、“鋼琴考級”（邦訳：ピアノグレード試験）を主たる内容としている10本の記事（1996年～2020年）⁸を取り上げ、ピアノグレード試験の影響を検討する。この10本の記事を踏まえると、中国のピアノ教育におけるピアノグレード試験の影響として、次の4点を指摘することができる。

(1) ピアノ教育の質の保障

ピアノグレード試験がピアノ教育の質を保障していたとする記事が多く見られる。『ピアノ芸術』の創刊者である周広仁は、「1991年から始まったピアノグレード試験により、子どものピアノの演奏技術や暗譜の能力は向上した。一方、ピアノ指導者の教育力は十分な程度に達していない」(1996:33, 筆者訳)と指摘する。呉巧曇・姫紅兵は「ピアノグレード試験を通して、受験生は試験官から適切な評価が得られるため、民間のピアノ教育は徐々に基準となる道筋をもつように発展してきた」(2003:49, 筆者訳)と述べている。王玫・趙耘は「ピアノグレード試験の展開は、民間のピアノ教育を促進した。なぜなら、各地方の受験生は、ピアノグレード試験を通して、試験官である音楽大学の教授の指導を受けられるようになったからである」(2003:40, 筆者訳)と述べている。また、劉玉明（2020）には、中国のピアニストである鮑蕙薔のインタビューが収録されている。

私〔鮑蕙菁〕は、試験官をしていた当時、ピアノの演奏において同じ間違い方で試験に落ちる複数の子とも出会った。その後、調査を通して、この子どもたちは同じピアノ教師に習っていたということがわかった。結果、この教師は、勤務先のピアノ教室を解任された。以上のようなことから、ピアノグレード試験は民間のピアノ教育に影響を与えていることがわかる。すなわち、ピアノグレード試験を受験する子どもを指導する教師の質を保障することに非常に役に立つということである。(劉 2020 : 41, 筆者訳)

※〔 〕内は筆者による補筆

この事例から、ピアノグレード試験には、地方のピアノ教師の指導力の向上と是正を促す側面があるといえる。周 (1996), 呉・姫 (2003), 王・趙 (2003), 劉 (2020) は、教師の指導力の乏しさが目立っていた民間のピアノ教育において、ピアノグレード試験はピアノ教育の質の保障に一役買っていたという見解を示している。

ここまで、いくつかの見解を紹介した。本項を総括すると、ピアノ教育の質の保障に関する諸氏の見解は、以下の3点にまとめることができる。

- | |
|---|
| <p>①ピアノグレード試験では試験内容と評価の観点が見られるため、ピアノ教師はテクニックや暗譜などをさらに重視するようになった。(周 1996)</p> <p>②試験官は、地方の受験生に適切な評価や指導をするようになった。(呉・姫 2003, 王・趙 2003)</p> <p>③ピアノグレード試験は地方のピアノ教師の指導力の向上と是正を促していた。(劉 2020)</p> |
|---|

統一された指導基準をもたないピアノ教育において、ピアノグレード試験の評価の観点は、ピアノ教師の指導方法に一定の方向性を示した。また、試験を通して、試験官は地方の受験生を指導するだけでなく、受験生の演奏を通して、ピアノ教師の指導力を把握することもできたのである。

(2) ピアノ教育の普及の促進

潘一飛 (1997), 王・趙 (2003), 王群 (2006) は、ピアノグレード試験の展開がピアノの学習ブームを促進したと述べている。潘は、「ピアノグレード試験は、音楽大学と師範大学への志願者数を増やし、音楽教育の普及、ピアノ製造業、出版業などの発展に貢献している」(1997 : 50, 筆者訳) と述べている。また、王・趙は、「ピアノグレード試験は、子どものピアノを学ぶ意欲を促進している。子どもだけではなく、ピアノを習わせたいという保護者の思いも高まり、ピアノ学習者はさらに増加した」(2003 : 40, 筆者訳) と述べている。王は、「ピアノグレード試験は、文化の現象と経済の現象である。それは、保護者の文化投資と教育投資を刺激している」(2006 : 56, 筆者訳) と述べている。ピアノグレード試験の展開は、ピアノ教育に関わる人をさらに増やし、ピアノ教育の普及を後押ししたと言える。本項を総括すると、ピアノ教育を促進した要因を、次頁の2点に集約することができる。

- ①ピアノグレード試験は、子どもの学習意欲を引き出した。(王・趙 2003)
- ②ピアノグレード試験の等級証書の取得を目的としたピアノ学習者が激増した。(潘 1997, 王 2006, 劉 2020)

ピアノグレード試験での等級証書の取得のために、ピアノを始める学習が増加していることからすると、ピアノグレード試験は中国のピアノ教育の普及に貢献したといえる。なぜ学習者は等級証書の取得に関心をもつようになったのか、その要因について次に述べる。

(3)「功利主義」「競争主義」の誘発

ピアノグレード試験の展開によって、「功利主義」「競争主義」が誘発されたとの指摘がある。潘(1997:51)は、ピアノグレード試験においてしばしば見られる「等級を飛ばす」という状況を取り上げている。「等級を飛ばす」とは、等級の順序を守らず、自身の能力に見合わない等級を受けることである。こうした状況を招いた原因として、潘(1997)、呉・姫(2003)、王・趙(2003)、王(2006)、趙(2009)、劉(2020)は、「功利主義」「競争主義」を挙げている。なぜ、人々は自身の能力とかけ離れた等級証書の取得を駆け足で目指すようになったのだろうか。ここでは、「進学とピアノグレード試験の関連政策」「ピアノ教育における評価基準の欠如」の2つの視点から、その要因に迫る。

①進学とピアノグレード試験の関連政策

素質教育⁹を推進するために、1996年から一部の難関大学では、中国全土から「芸術特長生」を迎え入れることができるようになった。「芸術特長生」とは、芸術の領域(音楽、器楽、舞踊、劇、書道、絵など)で、高い能力を有する入学者のことである。「芸術特長生」としての進学を望む場合、文系科目や理系科目だけでなく、芸術科目の試験も受ける必要がある。ただしこの場合、文系科目や理系科目の合格最低点は他の受験生より低く設定される。そして、「芸術特長生」の能力を把握するために、大学はピアノグレード試験の等級証書の提出を出願条件の一つに含めている。例えば、「北京理工大学2007年芸術特長生募集要項」によれば、2007年度の北京理工大学の「芸術特長生(鍵盤楽器専攻)」の出願条件の一つに、ピアノグレード試験の10級証書を取得していることが挙げられている。また、中学校、高等学校への進学に際しても、多くの学校がピアノグレード試験の等級証書を出願条件の一つとしたため、「芸術特長生」として受験することによって希望する学校に入学することができるようになった。

潘(1997)、王(2006)、劉(2020)は、このような状況から、子どもにピアノを学ばせる保護者が少なくないことを指摘している。また、この目的をもつ保護者の多くは、自分の子どもが早い段階で高い等級の証書を取得することを望んでいる。

②ピアノ教育における評価基準の欠如

周(1996:33)は、1990年代半ばの受験生の演奏から、ピアノ教師の指導力が不足していることを感じていた。その背景には、激増する受験生に対して、ピアノ教師の数が足りない状況に陥っていたことがある。そのため、専門的なピアノ教育を受けていない人が、ピアノ教師になるケースも散見された。王(2006:56)によれば、学歴や資格のないピアノ教師は、生徒が高い等級証書を取得するこ

とを、自身の指導力を証明する手段としていたという。

一方で、保護者も、子どもが取得した等級から、ピアノ教師の指導力や子どもの能力を判断している。この結果、王は「ピアノグレード試験はピアノ教育における唯一の目的と評価基準になった」(2003:57, 筆者訳)と述べている。つまり、進学とピアノグレード試験の関連政策の実施に伴うピアノ教育の加速度的な普及に引きずられ、保護者や学習者、ピアノ教師の「功利主義」「競争主義」は誘発されたと言える。

(4)「詰め込み教育」の助長

「功利主義」「競争主義」の影響によって、より早く、より高い等級証書を取得できるようにするための「詰め込み教育」が横行していることを指摘する研究者は少なくない。周(1996:33)は、ピアノグレード試験を通して、以下の3点をピアノ指導の問題点として認識していた。

- ①音楽の理解力が不足している。子どもはただ音符を弾くだけで、その演奏からフレーズや呼吸などは見えにくい。
- ②音楽の表現意欲が不足している。
- ③ハイフィンガー奏法ばかりに執着し、音色に豊かさが無い。

呉・姫(2003)は、辛うじて合格する受験生が多かったことを指摘している。また、「科学的、系統的な指導ができておらず、『読譜-訂正-習熟-ピアノグレード試験』という流れで教えるピアノ教師が多い」(2003:49, 筆者訳)と述べている。王(2006:56)は、ピアノグレード試験のためのピアノ指導には、技術偏重の傾向が見られると指摘し、具体的に下記の4点を挙げている。

- ①ピアノを教えるはいるが、音楽を教えていない。
- ②ピアノグレード試験の課題曲だけを弾いて、楽典、ソルフェージュ、鑑賞などを重視していない。
- ③打鍵や粒の揃った音色を強調する一方で、音色に対する想像力を軽視している。
- ④演奏速度を盲目的に追求している。

趙(2009:31)は、ピアノ教育の問題点を以下のように指摘している。

- ①ピアノグレード試験の試験内容をピアノ学習の唯一の教材としている。
- ②音符を弾くだけで、リズム、和声、フレーズ、楽典を軽視している。

諸氏の見解をまとめると、ピアノグレード試験のための「詰め込み教育」では、豊かな音楽表現よりも、課題曲を弾くための技術の指導に重心が置かれていた。

ピアノグレード試験の展開によるピアノ教育への影響には、両面性がある。多くの人がピアノ教育に関わり、ピアノ教育の普及を促進した点は評価できる。また、評価基準をもたないピアノ教育において、ピアノグレード試験はある程度の質の保障に寄与してきた。しかし、「功利主義」「競争主義」に支配された保護者と指導者が等級を盲目的に追求するようになってしまい、ピアノ教育は高い等級を取るための技能教育の面を強めていった。

3. 改革の方向性についての検討

前節では、中国のピアノ教育におけるピアノグレード試験の影響の両面性を明らかにした。本節では、これからの改革の方向性について検討する。

2019年の新京報に掲載された記事¹⁰において、中国の教育部体育衛生・芸術教育司長である王登峰は、「現在の美育教育の功利化傾向は、教育の評価体系と関わって、『芸術特长生』の加点を取り消すだけで、美育の実現が可能になる」(新京報 2019, 筆者訳)と述べ、芸術教育は美育を実現するべきだと呼びかけている。

美育は、中国の音楽教育における重要な教育思想である。漢末・魏初の徐干(170-217)は、「美育群材」¹²を提示し、中国において初めて美育思想を示した。近代では、王国維、蔡元培が西洋現代の美育思想を中国に導入した。美育思想は中国の学校教育を方向付けるものだが、その定義は絶えず検討され続けている。

2001年には、美育の展開のため、学校音楽科教育の課程理念は「音楽的審美を核心とする」とされた。中国教育部(2001)が制定した「全日制義務教育音楽課程標準(実験稿)」では、「音楽的審美を核心とする」という基本的理念について、次のように説明されている。

音楽教育の課程を貫くべきであり、知らず知らずの中に生徒の美しい情操及び健全な人格を育てるべきである。音楽の基礎知識と基礎技能を学習するのは、音楽的芸術を審美する体験に浸透すべきである。音楽の授業は、教師と生徒が共に音楽の美を体験し、発見し創造し、表現し、享受する過程であるべきである。音楽の授業中、音楽による情感の体験を強調し、音楽芸術の審美を表現する特徴に基づき、生徒に全体的に音楽の表現形式と情感を把握させ、音楽要素が音楽表現における役割を納得させる。(中国教育部 2001/筒石賢昭ら訳)

つまり、音楽教育は単なる基礎知識と基礎技能を教えるのではない。ここでは、生徒の音楽の審美能力の育成が音楽教育の目的に含まれていると読み取ることができる。

また、中国教育部(2015)は、美育を次のように定義している。

美育とは、審美教育、情操教育、心の教育である。人間の審美教養を向上するだけでなく、知らず知らずの中に人々の情感、興味関心事、気質等に影響を与え、心身に潤いをもたらすことができる。美育、徳育、智育、体育は相互に補い合って促進することである。(中国教育部 2015, 筆者訳)

この定義に立脚すれば、音楽教育による美育は、単なる知識と技能の学習ではない。それよりも、生徒が音楽の美を体験したり、表現したり、創造したりすることが重視される。しかし、ピアノグレード試験に関わって、高い等級証書を取得するために、保護者が子どもに暴力を加えた事案があったという(潘:1997:51)。また、「弾く」ことだけを学び、音楽を学ばない状況があることからすると、ピアノグレード試験のための「詰め込み教育」は、明らかに美育を実現していないだろう。

ピアノグレード試験は、ピアノ教育の質をある程度保障するだけでなく、どの程度の学習成果が得られたのかを客観的に示せなければ、学習者の達成感を満たしたり、学習意欲を引き出したりすることはできない。したがって、筆者はピアノ教育において美育をどのように実現するかという視点をも

ち、ピアノグレード試験を改革していかなければならないと考えている。

これまでの中国のピアノグレード試験の改革はどうだったのだろうか。劉小龍は、「中央音楽学院、中国音楽家協会は、ピアノグレード試験の教材の再編集を通して改革を試みていた。例えば、中国音楽家協会はピアノ課題曲の難易度を調整し、『級を飛ばす』状況を一定程度抑制した。しかし、教材の再編集は『詰め込み教育』の現状を改善するまでには至っていない」(2010:28, 筆者訳)と指摘している。

2020年、中国教育部は進学とピアノグレード試験の関連政策を取り下げた。これにより、今後、ピアノグレード試験の等級証書の取得をピアノ学習の目的とする保護者や学習者は減少していくことだろう。そのことは「功利主義」「競争主義」の蔓延が抑制されることをも意味する。では、美育を実現するため、ピアノグレード試験をどのように改革していったらよいらうか。筆者は、「グレード試験のためのピアノ教育」から、「ピアノ教育のためのグレード試験」への転換を提案したい。具体的には、以下の3点からピアノグレード試験を改革するべきだと考えている。

(1) 社会音楽教育の特性の把握

中国において、民間のピアノ教育は社会音楽教育に属する。社会音楽教育について、曹理(1993)は以下のように定義している。

社会音楽教育は、主に学校外の文芸機構、団体や個人によって行う音楽教育である。……一般的にいえば、社会音楽教育はほとんどアマチュアの性質があり、その原因について、学習者は主に放課後や仕事後の時間で、音楽の技巧を高めて、生活を豊かにする目的をもって、社会音楽教育を受けるのである。(曹 1993:310-311, 筆者訳)

また、社会音楽教育の価値について、曹(1993:311)は、以下の4点を挙げている。

- ①教育対象が広く、多方面からの学習者のニーズに対応することができる。
- ②国民の音楽能力を向上させることができる。
- ③個人や社会団体が積極的に音楽教育を行えば、音楽教育への国家の経済的な投資を抑制することができる。
- ④教育形式が多様なので、地域の状況に対応できるだけでなく、一人一人の能力や教養に応じた教育を実施することができる。

趙娟(2013:52)は、曹(1993)の定義を踏まえて、社会音楽教育の主な目的は、音楽を審美と教育の手段にあるとし、生徒の審美力や教養を向上させ、情操を陶冶し、心身の健全な発達を促進することにあると述べている。要するに、民間のピアノ教育は、職業的なピアノ演奏家を育成する専門的な音楽教育ではなく、美育を実現する責任を担う社会音楽教育ということである。

従って、ピアノ教育は学習者の様々なニーズに対応する必要があるが、演奏技術を中心する技能教育ではないことは確かである。ピアノ教育を受けるピアノ学習者の能力を検定するピアノグレード試験も、技能を検定することに留まらず、美育の重要性を強く掲げなくてはならない。

(2) 試験内容の再検討

前述のように、各認定機構の試験内容が異なる状況において、ピアノレッスンでどのような内容を指導すべきか、また、ピアノを演奏する上でどのような能力を身に付けるべきかという戸惑いが生じている。ここで、中国で実施されている海外の認定機構によるピアノグレード試験と比較したい。

中国で実施されている海外の認定機構によるピアノグレード試験には、ヤマハグレード試験、英国王立音楽検定（ABRSM）などがある。ヤマハ音楽振興会は、2005年に上海にヤマハ音楽教室を開設したのをはじめとし、現在では北京市、瀋陽市、大連市、成都市、天津市、青島市、杭州市、深圳市などの市級都市にも音楽教室を開設している。ヤマハグレード試験の等級は、13-11級、10-6級、5-3級、2-1級に分けられている。5-1級は、特に音楽の指導者や専門家、演奏家を目指す人を対象としたものである。本稿ではピアノ学習者向けの13-11級、10-6級を検討の対象とし、試験内容を表3に示している。

表3：ヤマハグレード試験

等級 (対象)	試験内容	
	ピアノ演奏	その他
13-11級 (鍵盤初期学習者)	①自由曲 ②課題曲	①メロディー聴奏(唱) ②ハーモニー聴唱・聴奏 ③メロディー視奏
10-6級 (音楽を学んでいる人や趣味で 楽しんでいる人)	①自由曲 ②課題曲	①初見演奏 ②伴奏づけ、即興演奏 ③聴奏

ヤマハグレード試験の試験内容を見ると、弾くことだけでなく、聴くこと、歌うこと、読むことも測られている。

英国王立音楽検定は、1889年に英国で誕生した。2009年に、上海に華東地区センターが設立されたことをきっかけに、中国全土に広まった。具体的な試験内容は、表4のとおりである。

表4：英国王立音楽検定

等級	試験内容	
	ピアノ演奏	そのほか
1-8級	①バロック時代 1曲 ②古典派 1曲 ③ロマン派 1曲	①楽典 ②音階、和音、アルペジオ ③初見演奏、視唱 ④聴音

英国王立音楽検定も弾くことだけでなく、聴くこと、読むこと、歌うこと、さらに音楽理論を課している。そこで、中国のピアノグレード試験と海外の2つのピアノグレード試験で求められている音楽能力を比較するために対照表を作成した(表5参照)。

表5：試験で求められている音楽能力

音楽能力	中国のピアノグレード試験 ¹²	海外のピアノグレード試験 ¹³
弾く	○	○
音楽理論	△	△
聴く	△	○
歌う	△	○
読む	△	○

*△は完全に当てはまるものではないが、関連する内容が含まれている。

中国では、すべての認定機構が弾くこと以外の音楽能力を検定しているわけではない。一方、海外の2つのピアノグレード試験は、ともに「弾く」「聴く」「歌う」「読む」を課題に含めている。海外のピアノグレード試験からは、ピアノ教育において弾くことだけを教えるのではなく、学習者の音楽能力を総合的に育てることを重視する考えが読み取れる。一方、中国のピアノグレード試験からは、ピアノ教育において、「弾く」以外のことをどのように教えるかという課題が残されている状況を知ることができる。

音楽の能力の獲得に関して、ヴァージニア・ホッジ・ミード（2006）は、図1を提示している。

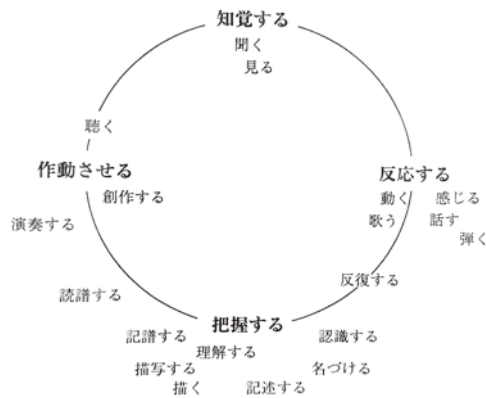


図1 「音楽的教養の獲得につながる関与の環」(ホッジ・ミード／神原ら訳 2006：19)

この図について、神原（2014）は次のように解説している。

音楽の学習は、音や音楽との出会い（聴くこと）から始まる。周囲の音の存在に気づき、音に注意を注ぐのである（＝知覚）。音楽の学習は、ただ単に聴くだけでは深まらない。何らかのかかわりが必要である。幼児は音を聴き、年齢や経験に応じて、動く、歌う、話す、弾くなどの行為（＝音楽反応）を通して、音楽との一体感を楽しむのである。楽しみは、音楽との反復的なかわりを促す。その体験の過程で、幼児は音楽のさまざまな仕組みや特徴に気づくようになる。音楽

理解の深まりによって、音や音楽にさまざまな意味を感じ取られるようになる（＝把握、音楽理解）。こうして、幼児の音楽的な行為は、想像的・創造的な表現へと導かれていく（＝表現）。幼児の音楽活動は、このような学習の環をたどりながら、質的に洗練されていくのである。一見して同じように見える音楽活動であっても、その内的な活動の状況は、刻々と変化しているのである。（神原 2014：14-15）

神原（2014）は、図1に示した「作動させる」を「表現する」と理解し、訳を改めている。音楽的教養の獲得という視点から見れば、「聴く」ことや「弾く」ことだけでは、生徒が音楽を理解したり、表現したりできるようなにはならない。ピアノ演奏という行為を図1にあてはめて考えると、「知覚する」から「作動させる（表現する）」に至るまで、ピアノを「弾く」以外に、「聴く」「聞く」「動く」「感じる」「理解する」「認識する」などのプロセスを辿ることになる。その際に、「知覚する」「反応する」「把握する」という段階を飛ばしてしまうと、「作動させる（表現する）」に至ることが困難になる。

そこで筆者は、ピアノグレード試験においても、「弾く」こと以外の音楽能力を軽視してはならないと考える。ピアノの入門期や低年齢の学習にこそ、音楽的教養を獲得した上で、ピアノ演奏とそのための総合的な音楽能力のバランスをよく検討する試験内容の設定が必要なはずである。

（3）評価の観点の明示

上述の5つの認定機構の中で、中国音楽学院だけが等級に応じた評価の観点を公開している。他の機構も暗譜や演奏の流暢さなどの観点を公開してはいるが、「ピアノが弾ける」という域を出ていないように感じられる。受験生の成績を決める試験官がどのような基準で評価しているかは定かでないが、ピアノ演奏の評価に絶対的な基準はなく、相対的かつ主観的になりがちである。しかし、ピアノ教育を改善するためには、ピアノグレード試験における詳細な評価の観点を示す必要がある。

そこで、「ピアノが弾ける」程度に止まるのではなく、ピアノ教育を美育とするために、筆者はピアノグレード試験の評価の観点到以下3点を含めることを提案する。

①ピアノ演奏の技術や音楽表現に関する評価の観点

暗譜、演奏の流暢さだけでなく、リズム、和声、フレーズなど音楽を形づくっている要素を基盤とした観点が必要である。なお、年齢、等級によって、音楽的発達に基づく段階的な評価の観点を明確にできると、「級を飛ばす」などの状況が発生することを抑制できるだろう。

②ピアノグレード試験の趣旨に応じた評価の観点

ピアノグレード試験の趣旨は、芸術教育の普及と国民教養の向上にある。受験生に対する評価の観点であるため、ここでは、国民教養の向上についてのみ検討する。これまで述べてきたように、中国において、音楽は人間の内外に作用し、教養や人格の形成に役に立つもの、すなわち国民教養を向上するものとして認められている。そうしたことから、教養や人格の形成につながる評価の観点が必要になるだろう。

③美育の実現に関する評価の観点

美育は「音楽的審美を核心とする」ことを原則としている。言い換えれば、ピアノ教育は演奏だけではなく、音楽全般の教育である。そこで、ただピアノの演奏技術を評価するのではなく、美育の実

現のため、音楽の理解力、感受性、審美の能力などを評価の観点に含める必要がある。

おわりに

本稿では、『ピアノ芸術』に掲載されたピアノグレード試験に関する記事の分析を通して、1991年に始まった中国のピアノグレード試験がピアノ教育に及ぼした影響について論じた。ピアノグレード試験はピアノ教育の質を保障したり、普及・促進したりする一方で、「功利主義」「競争主義」、「詰め込み教育」を誘発したことが明らかになった。中国の学校音楽教育や社会音楽教育がねらいとする美育を実現するために、中国教育部は2020年に進学とピアノグレード試験の関連政策を取り下げた。この決定は、保護者やピアノ教師による「功利主義」「競争主義」の抑制につながるかもしれない。

しかし、どのように美育を実現するのかについては、未だに明確になっていない。そこで筆者は、「ピアノグレード試験のためのピアノ教育」から、「ピアノ教育のためのピアノグレード試験」への転換を提案した上で、ピアノグレード試験の改革に関する3つの視点を示した。1つ目は、学習者のさまざまなニーズに対応しつつ、かつ美育の実現を目指す社会音楽教育の特性を把握することである。2つ目は、音楽的教養を獲得した上で、ピアノ演奏とそのための総合的な音楽能力のバランスを考えた試験内容を設定することである。3つ目は、ピアノ演奏の技術と音楽表現、ピアノグレード試験の趣旨、美育という3つの方面から評価の観点を明示することである。

美育の思想は、長きに亘り中国の学校教育に影響を与えてきたが、ピアノ教育においてどのように美育を実現するかは、解決に至っていない。今後の課題は、美育の実現のためのピアノ指導法を検討することである。

註

- 1 英国王立音楽検定（ABRSM）は1889年に、4つの英国王立音楽大学のもとに設立され、音楽の普及と音楽教育の向上を目的とする世界最大規模の音楽検定である。
- 2 ピアノグレード試験は音楽、舞踊、美術、演劇及び戯曲、曲芸の5項目に分類されている。この「音楽」の項目には、ピアノ、声楽、管弦打楽器、民族楽器の部門がある。
- 3 两会とは、全国人民代表大会と中国人民政治協商会議である。
- 4 中国音楽家協会、中央音楽学院、中国音楽学院、上海音楽学院、四川音楽学院のピアノグレード試験である。
- 5 口語訳では、詩を学んで人としての心をふるい起こし、礼を学んで人としての行いを確立し、音楽を学んで人間を完成させるのである。要旨では、詩と礼と音楽の三つが大切な教養である。
- 6 中国音楽家協会音楽考級委員会編（2019）、央音楽学院考級委員会編（2010）、王黎光（2019）、上海音楽学院社会芸術水平考級專家委員会（2020）、王雁（2021）。
- 7 西洋音楽史とアジア音楽史が含まれている。
- 8 『ピアノ芸術』における“鋼琴考級”をキーワードとする10本の記事及び要約。

	著者	記事名(邦訳)と要約
1	周広仁 (1996)	《在钢琴普及教育中应重视的教学问题》(邦訳:ピアノの普及教育における重視すべき指導の問題) ピアノグレード試験の実施により、子どもの指のテクニックや暗譜の能力が向上した一方で、当時のピアノ教育は、科学的な指導や音楽表現の指導力が欠如である状況になっている。それに対して、ピアノの学習を通して、音楽を学ぶのを呼びかけている。
2	潘一飛 (1997)	《漫谈钢琴考级》(邦訳:ピアノグレード試験についての雑談) ピアノグレード試験の展開は、ピアノ学習ブーム、ピアノ製造業を促進した。一方で、ピアノ教育における「競争主義」、「功利主義」を誘発した。特に、子どもが高い等級を取得したり、音楽家になったりするため、ある保護者は子どもに暴力を加えた。このような状況は、ピアノグレード試験の趣旨に違反したと言える。そこで、保護者は、正確な才能観を持ち、ピアノグレード試験に合理的に参与するべきである。
3	魏廷格 (1998)	《从钢琴考级的意义说到教材及评审标准》(邦訳:ピアノグレード試験の意義から教材及び審査標準まで) ピアノグレード試験における「ピアノ学習ブーム」は「美育」の実現を推進したことをピアノグレード試験の意義としている。また、多数のピアノ学習者はピアノグレード試験に関与しているので、ピアノグレード試験の意義は教材と関連している。そのため、ピアノグレード試験の修訂について、以下のように提案している。 ①教材の権威性を強調する。特に、芸術価値、作曲の技法、ピアノのテクニックという3つの方面を融合できるピアノ作品を指す。／②中国の民族性をさらに重視する。／③アマチュアピアノ学習者にふさわしい教材。／④教材の更新頻度(3年)また、評語について、音楽表現、美的体験、芸術的な想像力を啓発できる評価を重視するべきだと提唱している。
4	吳巧曇・ 姬紅兵 (2003)	《试论钢琴考级中的“勉强通过”》(邦訳:ピアノグレード試験における「ギリギリ合格」に関する研究) ピアノグレード試験の実施に伴い、ピアノ教育はもっと規範的、正規的になった一方で、「ギリギリ合格」という状況がよく見られる。その原因について、以下のように挙げられる。 ①「読譜—訂正—習熟—ピアノグレード試験」という科学ではないピアノ指導法がよく見られる。／②保護者の音楽能力が低下し、さらに「功利主義」、「競争主義」の傾向がある。／③練習時間が足りない。
5	王玫・ 趙耘 (2003)	《另眼看考级》(邦訳:ピアノグレード試験に関する他の見方) ピアノグレード試験の展開は、ピアノ教育の規範化を促進した。有名なピアノ教育家、ピアニストは試験官として、各地区のピアノ学習者を指導するので、全国のピアノ教育の発展に有益である。その一方で、ピアノグレード試験をピアノ学びの唯一の目的として、ピアノグレード試験の課題曲だけを弾くという状況がよく見られる。それは、ピアノグレード試験の趣旨を違反しただろうと言える。要するに、真のピアノ教育が実現することができるように、学習者や保護者やピアノ教師は、ピアノグレード試験に正しい態度を持つべきである。
6	王群 (2006)	《人文精神缺失：钢琴热的冷思考》(邦訳:人文精神の欠如：ピアノブームに関する思考) 文化現象だけではなく、経済的現象になったピアノグレード試験は、その趣旨を違反したと批判している。具体的な問題点について、ピアノを学ぶが、音楽を学ばないこと、功利主義を指摘している。
7	趙晓生 (2009)	《关于钢琴考级的几点思考》(邦訳:ピアノグレード試験に関する幾つかの考え) ピアノグレード試験における「競争主義」、「級を飛ぶ」という現象を指摘している。ピアノ教育におけるピアノ指導法について、ピアノグレード試験の課題曲をピアノ学習の唯一の教材としているだけではなく、音符だけを弾いて、リズム、和声、フレーズ、楽典を無視することを指摘している。
8	劉小龍 (2010)	《关于钢琴考级的几点思考》(邦訳:ピアノグレード試験に関する幾つかの思考) 等級証書の取得をピアノ学習の目的として、級を飛ぶという状況がよく見られる以外、ピアノ教育における「ピアノ速成」の現象を指摘している。そのため、ピアノグレード試験の教材を改革することを試みたが、著しい効果が見られにくい。しかし、この時期から、ピアノグレード試験に反対して、ピアノ教育の「詰め込み」を批判する保護者が見られた。
9	周铭孫 (2017)	《国内钢琴考级的先行者》(邦訳:国内のピアノグレード試験の先行者) 上海のピアノグレード試験の教材は毎年を更新し、毎回の課題曲を試験日の3ヶ月前に公開する。また、各等級の曲目を自由に選ぶことができなくなった。
10	劉玉明 (2020)	《聆听与铭记—鲍蕙荪老师面对面》(邦訳:拝聴と銘記—鮑蕙荪先生との出会い) 鮑によれば、保護者たちがたくさんの文句を発表しているため、現在のピアノグレード試験は、最初より厳しくなくなった。また、ピアノグレード試験の産業は今でも存在していると指摘している。

9 素質教育とは、子どものさまざまな素質や人間性を育てようとする教育のことであり、受験教育以外の教育全般を指す言葉として一般的に使われる。対義語は「応試教育(受験教育)」である。

10 教育部:実施美育須取消特长生加分」(邦訳:教育部:美育の実施のため、特长生の加点を取り消すべき)。

- 11 「六芸」と「六儀」を通して「群材」を育む。そして、「君子」の人格を養成する。
- 12 中国音楽家協会, 中央音楽学院, 中国音楽学院, 上海音楽学院, 四川音楽学院のピアノグレード試験を取り上げた。
- 13 ヤマハグレード試験と英国王立音楽検定を取り上げた。

参考文献・Webサイト

- 王玫・趙耘 2003 「另眼看考级」『钢琴芸術』第12期：40-41
- 王群 2006 「人文精神缺失：钢琴热的冷思考」『钢琴艺术』第9期：56-57
- 王黎光 2019 『中国音乐学院社会艺术水平考级精品教材—钢琴』 北京：中国青年出版社
- 王雁 2021 『四川音乐学院社会艺术水平考级全国通用教材』 成都：四川文艺出版社
- 神原雅之 2014 『幼児音楽教育要論』 東京：開成出版
- 高婷 2001 「孔子の教育思想における「楽」の位置について：「詩」「禮」「楽」の関わりを中心に」『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』第53号：43-54
- 魏廷格 1998 「从钢琴考级的意义说到教材及评审标准」『钢琴艺术』第6期：44-46
- 呉巧曇・姫紅兵 2003 「试论钢琴考级中的“勉强通过”」『钢琴艺术』第9期：49-50
- 新浪教育 2006 「北京理工大学2007年芸術特長生募集要項」
<http://edu.sina.com.cn/exam/2006-12-11/172864188.html> (2021年8月9日最終閲覧)
- 新京報 2019 「教育部：实施美育须取消特长生加分」
<http://politics.people.com.cn/n1/2019/0416/c100131031688.html> (2021年8月18日閲覧)
- 上海音楽学院社会艺术水平考级專家委員会 2020 『上海音乐学院社会艺术水平考级曲集系列—钢琴考级曲集』 上海：上海音楽学院出版社
- 中国文化部 2004 『ピアノグレード試験管理方法』
http://www.gov.cn/bumenfuwu/200611/24/content_2600290.htm (2021年8月18日閲覧)
- 中国教育部 2015 『国务院办公厅关于全面加强和改进学校美育工作的意见』
http://www.gov.cn/zhengce/content/2015-09/28/content_10196.htm (2021年9月3日閲覧)
- 中国教育部 2001 筒石賢昭ら (訳)『全日制義務教育音楽課程標準 (実験稿)』 北京：北京師範大学出版社
http://www.u-gakugei.ac.jp/~graduate/rengou/kyouin/news/data_kouiki_h25/10.pdf
 (2021年12月21日閲覧)
- 中国音楽家協会音楽考级委員会編 2019 『全国钢琴演奏考级作品集 (新编第二版)』 北京：人民音楽出版社
- 中央音楽学院考级委員会編 2010 『钢琴业余考级教程』 北京：人民音楽出版社
- 周広仁 1996 「在钢琴普及教育中应重视的教学问题」『钢琴艺术』(02) 33-34
- 周銘孫 2017 「国内钢琴考级的先行者」『钢琴艺术』第7期：37-38
- 趙曉生 2009 「关于钢琴考级的几点思考」『钢琴艺术』第12期：31
- ミード, ヴァージニア・ホッジ 2006 神原雅之/板野和彦/山下善子 (訳) 『ダルクローズ・アプローチによる子どものための音楽授業』 岡山：ふくろう出版
- 劉小龍 2010 「中国钢琴芸術发展60年 (九) 学琴热潮中的钢琴考级」『钢琴艺术』第1期：26-28

劉玉明 2020 「聆听与铭记-与鲍蕙荞老师面对面」『钢琴艺术』第1期：37-43

曹理 1993 『普通学校音楽教育学』上海：上海教育出版社

田奔 2000 「中国の『素質教育』についての検討：経済の高度成長期における中日の教育政策の比較」『東京
京都立大学人文学部 人文学報』第35号：101-121

日本貿易振興機構 2012 「中国楽器市場調査」

https://www.jetro.go.jp/ext_images/jfile/report/07001163/report.pdf (2021年8月18日閲覧)

潘一飛 1997 「漫谈钢琴考级」『钢琴芸術』第6期：50-53

北京晚报 2021 「建议取消音乐类考级上热搜 李心草委员回应」

<http://news.cnnb.com.cn/system/2021/03/10/030235154.shtml> (2021年5月11日閲覧)

梁娜 2013 「论社会音乐教育对提高国民素质的作用」『北方音乐』第9期：119-120